様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２３５８

研究課題名（和文）併合に基づく格付与の比較統語論研究

研究課題名（英文）A merge-based comparative syntax of Case-assignment

研究代表者
高橋　真彦（Takahashi, Masahiko）

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：３０７０９２０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトでは、格付与のメカニズムとしての一致を検証した。特に、日本語の例外的格標示構文を取り上げ、一致による格付与を含意する随意的移動分析を支持するとされてきた現象を詳細に検証した。その上で、それらの現象を一致による格付与を必ずしも含意しない義務的移動分析の下でも分析可能であると主張した。具体的には、随意的移動分析を支持するとされてきた不定代名詞の分布と付加詞の分布を取り上げ、これらの事実が義務的移動分析と矛盾しない形で分析できると主張した。特に、（i）不定代名詞の分布は転送領域によって決定される、（２）付加部は名詞句移動に「ただ乗り」できると提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究での提案が正しい限りにおいて、格付与のメカニズムとしての一致（Agree）を支持するとされてきた経験的証拠を再考する必要性が示唆される。これは、普遍文法における格付与のメカニズム及び格付与にかかる一致の必要性について再考する契機となり、普遍文法研究の発展に貢献するものと考えられる。また、不定代名詞と付加部の分布に関する新たな言語事実も提示され、記述的な貢献もある。

研究成果の概要（英文）：This research project examined some arguments for Agree as a mechanism of Case-assignment. In particular, I examined some arguments for the optional raising analysis of Japanese ECM constructions, which necessitates Agree. I argued that the relevant observations can be analyzed even under the obligatory raising analysis, which does not necessarily require Agree. Specifically, I argued that the distributions of both ECMed indeterminate pronouns and embedded adjuncts, which have been taken as evidence for the optionality of raising, can be reconciled with the obligatory raising analysis. I proposed that (i) the distribution of indeterminate pronouns is interpreted in terms of a condition defined in Transfer domains and (ii) A-movement allows adjuncts to take a “free ride.”

研究分野：統語論

キーワード：格付与　併合　一致　例外的格標示構文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の生成文法においては、統語部門が併合 (Merge) と一致 (Agree) という２つの操作を有すると仮定されており、Chomsky (2000) は格付与が一致によって行われると提案している。一致のメカニズムは以下に例示される。

(1)　I [$_{vP}$ $v_{\varphi[3rd.sing]}$ believe [$_{TP}$ [$_{NP}$ John]$_{[ACC]}$ to have convinced Bill]]

(Lasnik and Saito: 325 に基づき改変)

(1) の小動詞 (*v*) は（発音されない）三人称単数の値を *John* から受け、*John* は対格を受ける。一致は格付与に際し当該名詞句の内的併合（移動）を必要としない点でそれ以前の格付与の分析 (Chomsky 1993, Koizumi 1995) と異なり、一致に基づく格付与の研究は多くの重要な研究を生み出してきた (Hiraiwa 2002, 2005 等) 。

しかし近年では一致について様々な課題が指摘され、一致によらない格付与のメカニズムのが検討されつつある (Bošković 2007, Saito 2012, 2016, Zushi 2016)。例えば [1] 普遍文法の単純化の障壁になる (Hornsein 2009)、 [2] 前提となる述語と名詞句の一致を有さない日本語のような言語がある、という指摘がなされている (Fukui, 1988, Kuroda 1988, Saito 2016)。

２．研究の目的

以上のような背景を踏まえ、本研究の目的は以下の中心的問いについて考察することであった。

(2)　一致 (Agree) は格付与に関わる操作として果たして必要なものか。併合 (Merge) によってのみ格付与を分析することはできないのか。

この考察のために、一致に基づく格付与を支持するとされてきた諸現象を、併合に基づいて分析できるか検証した。その後、分析の結果に基づき理論的帰結を検討した。

３．研究の方法

一致 (Agree) による格付与を支持するとされてきた諸現象を、一致を必ずしも含意しないかたちで分析できるか検証した。特に、例外的格標示構文における対格主語の振る舞いを取り上げ、一致による格付与を含意するとされてきた観察を再検証し、その理論的帰結を考察した。研究の成果を研究会などで発表し、評価及びフィードバックを受けた。また、研究成果を論文としても公開した。

４．研究成果

２０１８年度 : 日本語の例外的格標示構文において、一致による格付与を含意する随意的移動分析 (Hiraiwa 2001, 2005) を支持するとされてきた諸現象を詳細に検証した。具体的には、それらの現象を一致による格付与を必ずしも含意しない義務的移動分析 (Kuno 1976, Tanaka 2002) の下でどのように分析できるか検討した。特に以下の２点について考察し、その成果を公表した。

（１）不定代名詞の分布と付加詞の分布

これらの現象については、分析の前提となる仮定自体を見直すべきであると主張した。具体的には、 (A) 不定代名詞の分布は転送領域によって決定される、(B) 補文標識句内の付加部は対格主語の移動に「ただ乗り」する (Saito 1994, Sohn 1994) と提案し、両事実を義務的移動分析によっても説明できると主張した。これらの主張は不定代名詞の分布と付加詞の分布に関する新たな事実観察によって支持される。この研究成果は日本英文学会第９０回大会シンポジアム「Merge と Labeling を巡って」にて発表された。

（２）例外的格標示と補文の種類との相関関係

補文標識「か」を有する節（以下「か」節）への例外的格標示が一定の制約を受けることが報告されている (Hiraiwa 2010)。この観察をラベル付けアルゴリズムの観点から分析し、その帰結を考察した。具体的には、ある種の補文の主語に対して例外的格標示ができないことは、主節でのラベル付けが成立しないことに帰されると主張した。この分析は補文と格の分布の相関関係によって支持される。この研究成果は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」第５回ワークショップにて発表された。

２０１９年度：前年度に引き続き日本語例外的格標示構文の考察を行い、その分析が与える理論的帰結について考察した。特に、以下の２点について考察し、その成果を公表した。

（１）　不定代名詞の分布に課せられる条件
対格主語への格付与のメカニズムを検証する上で、「も」および「も」と依存関係にある不定代名詞の分布に課せられる条件の検証は重要である。この分布の条件を前年度に引き続き検討した。具体的には、「「も」および「も」と依存関係にある不定代名詞は同一の転送領域に生起しなくてはならない」という前年度の提案の妥当性を検証した。考察の結果、補文標識「と」に添加されている「も」と「と」を有する節（「と」節）内の不定代名詞の依存関係が文副詞の介在によって妨げられるという観察を提示し、この観察が、上記の分析によって正しく予測されることを示した。この研究成果は Syntax に掲載された。

（２）例外的格標示とラベル付け
補文標識「か」を有する節（以下「か」節）への例外的格標示に関する制約を引き続き考察した。特に、当該の制約が動詞句内のラベル付けができないことに還元されるという前年度の提案の妥当性を検証した。考察の結果、この提案が、(A) 当該の制約が使役文に見られる二重対格制約に還元できる、(B)「か」節が格を有さない場合は「か」節への例外的格標示が可能になる、(C)「か」節が主格を付与される場合、「か」節内部から主節主語位置への名詞句移動が可能になること、以上３点によって支持されることが明らかになった。この成果は Keio-Nanzan One Day Workshop on Minimalist Syntax にて報告された。

２０２０年度：引き続き例外的格標示構文における対格主語の振る舞いの分析を継続し、その理論的・経験的帰結を考察した。特に、２０１８年度に提案した「ただ乗り」分析の更なる帰結を考察した。この「ただ乗り」分析は、（１）対格主語が「のこと」を伴わない場合の分析、そして（２）対格主語が「のこと」を伴う場合の分析、以上２点ついて示唆を与える。まず（１）については、「のこと」を伴わない対格主語と付加部の分布を大目的語分析 (Hoji 1991) では捉えることが困難であると指摘した。これは、当該の「ただ乗り」が同節要素制限に従うものの (cf. Takano 2002)、大目的語分析は対格主語と補文の付加部が同節に生起しないことを含意するためである。次に、（２）については、対格主語が「のこと」を伴う場合、大目的語分析 (Kishimoto 2018) に加えて、（随意的・義務的）移動分析も必要であると主張した。これは、補文の付加部が「のこと」を伴う対格主語に先行できるからである。上記の「ただ乗り」及び同節要素制限を踏まえると、この観察は、「のこと」を伴う対格主語と補文の付加部が同節に生起することを示唆する。したがって、「のこと」を伴う対格主語が補文内に基底生成されることを含意する移動分析が必要となる。上記の成果は「日本語研究から生成文法理論へ」及び Nanzan Linguistics 16 にて公開された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 髙橋真彦	４．巻 N/A
２．論文標題 例外的格標示構文の対格主語	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語研究から生成文法理論へ	６．最初と最後の頁 266-281
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masahiko Takahashi	４．巻 24
２．論文標題 Reconsidering the Optionality of Raising in Japanese Exceptional Case-Marking Constructions*	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Syntax	６．最初と最後の頁 224-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/synt.12206	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masahiko Takahashi	４．巻 97
２．論文標題 Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda (eds.), Handbook of Japanese Syntax (Review)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Studies in English Literature	６．最初と最後の頁 132-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20759/elsjp.97.0_132	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Masahiko Takahashi	４．巻 16
２．論文標題 Accusative subjects in Japanese ECM constructions	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Nanzan Linguistics	６．最初と最後の頁 133-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Masahiko Takahashi
２．発表標題 Raising to Object, Clausal Arguments, and Labeling
３．学会等名 Keio-Nanzan One Day Workshop on Minimalist Syntax（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 髙橋真彦
２．発表標題 例外的格標示構文における対格主語の統語的位置について
３．学会等名 日本英文学会第９０回大会シンポジアム「Merge と Labeling を巡って」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masahiko Takahashi
２．発表標題 Raising to Object and Clausal Arguments
３．学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ ： 統語理論と言語獲得」第５回ワークショップ（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関